

『戀愛-koiai-』

著: 崎谷はるひ

ill: タカツキノボル

「訊かねえの」

「なにを」

「なんでキスしたのかとか」

どうにか浮かべていたぎこちない笑いすら消え失せる。

「あんまりおもしろくない冗談だったな」

「そういう逃げかよ」

「ほかになにがあるわけ。二十九にもなって、酒のノリでギャグかますにはちょっと、身体張りすぎだろ」

ため息まじりの言葉に、奥田が顔をしかめた。

「あんなタイミングで、ギャグになんねえじゃん」

「じゃあなんだつつうわけ！ 意味わかんねえし！」

「チャンスかと思っただけだろが！」

キレ気味に怒鳴った言葉を、倍の勢いで返された。目をまるくした達巳に、奥田は

「ああくそ」と茶色い髪を搔(か)きむしる。

「おまえこそ、俺のことわかっとけよ。ああいうことをシャレにするほど、俺、趣味悪くねえぞ」

「だっ……だっ、なんで、いきなり」

「彼氏もいねーし、宍戸さんともなんでもねーつつうし、クリスマスだし？」

白い息が彼の乾いた唇のまわりでふわりと漂う。自分の息も同じくらいにまっしろで、ふわふわ、ふわふわと寒空に漂う。

言葉が質量になって見えるかのようで、胸がずきずきと痛くなってくる。けれど奥田の気持ちがわからない。

「俺、そういう軽いのか、無理……」

「軽くねえし、つつうか、もういいかなって」

もういいって、なにがだ。声にならない言葉を聞き取ったように、奥田は言った。

「だっっておまえ、俺のこと好きだろ。つか、大学のころは確実に、好きだったよな？」

「……！ な、ど、ど、して」

「どうしてって、俺のこと好きな人間は、見てたらわかるから」

言葉を失い、茫然と立ちすくみながらも、達巳はどこかで納得している自分を知った。(まあ、でも、そうだよな)

奥田はけっして鈍(にぶ)い人間ではない。彼がモテたのは、周囲から飛んでくる秋(しゅう)波(は)を上手にキャッチし、あるいはスルーして、バランスよく愛情を受けとめてきたからだ。むしろそれは友情の意味でも同じで、好意を寄せてくれた人間に対してやさしく振る舞う。

といっても不誠実な真似は決してしない。深みにはまりたくない相手にもうまいこと距離をとる彼だからこそ、『女たらし』ではなく『人気者』であり続けた。

それはいまでも同じで、ひととひとをつなぐ現場で立ちまわれるのは、根本的に人間関係の坎がいいからだ。

ふっと苦い笑いが漏(も)れる。

「なんで、いまさら？」

達巳は自分でも意外なほど、落ちついた——むしろ冷めていると言ってもいいほどの低い声がでたことに驚いた。それは奥田も同じだったようで、軽く目を瞠(みは)っている。

「ばればれだったんだろ、俺。それでずっと、恋愛の意味ではスルーされてたわけだろ」

うろたえてはいるけれど、同時に妙な安(あん)堵(ど)も覚えた。隠しごとをしているよううしろめたさだけは、今度は味わわずにすむからだ。

穏やかに問いかけると、奥田はすこし気まずそうな顔になった。

「ばればれってか……や、ここ数年は、わかんなかったけど」

「うん、まあ、ここ数年であきらめつけたからな」

「え」

はっとしたように顔をあげる彼に、達巳は笑った。震えるのは、きっと寒さのせいだろう。

「そりゃ見こみなけりゃあきらめるだろ、ふつう」

これも半分嘘で、半分本音だ。

大学一年のとき、十八歳で知りあって、もう十一年がすぎた。奥田への思いは、十代の終わりから二十代なかばくらいまで、ずっと引きずっていた。

その間、いろんな人間に目移りしてみようと思った。努力もしたし、恋人を作ったこともある。だが抜けない棘(とげ)のように、心の奥にはいつも奥田がいるままだった。

いろいろ頑張って、結局無理で、中途半端に終わる恋を数回繰り返したあとに、折りあいをつけた。

悩んだり苦しんだすえ、ここ数年で、せめて友人でさえいらればいいと気持ちの整理をつけられたのだ。なのに、彼はあっさりと爆弾を落としてきた。

「あきらめるって、俺のこと、もう好きじゃねえの？」

達巳の十一年を無駄にするような、好かれる人間特有の傲(ごう)慢(まん)さ。そうやすやすと乗ってやれるほど浅くもないし、あまくもない。

「好きじゃないっていうか、そもそも俺、おまえとどうこうなろうって思ったことは一度もないけど？」

「ええ!？」

そこまで驚くことかと、達巳はおかしくなった。

十一年、ずっと目のまえに、心のなかに居続けた男の姿を追い払うのはむずかしかった。

だがそれでも、二十代を折り返し、三十近くなってやっとすこし、落ちついた。その間中、奥田には定期的に恋人がいたし、そもそもすべて女性ばかりだった。

「当然だろ？ ノンケ相手の不毛な恋とか、本気になるだけアホだよ」

「アホって、おまえ」

「それにさ。いまの話、俺がおまえのこと好きじゃないかもしれないって気づいてから、その気になったように聞こえる」

指摘に、奥田は気まずい顔でもしてみせるかと思った。けれど彼は「ああ、うん」とあっさりうなずいて、達巳のほうに驚いた。

「そのとおりかな。あれって感じしてさ。だから本命できたのかって思った」

「本命って、社長か」

「じゃなくても、誰かいんのかなって。それはやだなと思ってさ」

「……子どもかよ。ひとにとられんのがいやでちよっかいだすとか、最低だろ」

応える気もなかったくせに。さすがにいらだちをあらわにして達巳がなじると、奥田は「なんでだよ」と口を尖(とが)らせる。

「なんでって、そんなくだらない所有欲で振りまわされるこっちの身にもなれよ」

「きっかけはべつにいいじゃん。好きになったんだから所有欲あったって変じゃないだろ」

「だからそれがおかし——」

言いかけて、はたと達巳は口を閉ざした。しばしばと目をしばたたかせ、じっと奥田を見る。彼はいやそうに顔を歪(ゆが)めた。

「好きになっちゃったんですよ。そっちが好きじゃなくなったとたんに気づくって、すっげーだせえけどさあ」

「え……おまえ、俺のこと好きなの」

「だーから、さっきからそう言ってんだろ！」

いや言ってないし、というのは言葉にならなかった。怒った顔をした奥田が腕を掴んで、いきなり引き寄せてきたからだ。

「つーか、俺、たぶんむかしから、好きだったんだよ」

本文 p22～27 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>